

協同学習を用いた小児看護学概論の授業実践

北村敦子（武庫川女子大学大学院臨床教育学科）

緒方 巧（梅花女子大学看護保健学部看護学科）

キーワード：協同学習、小児看護学、ジグソー学習法

1. 背景と目的

看護学の専門科目は、基礎看護学、成人看護学、老年看護学、小児看護学、母性看護学、精神看護学、在宅看護論、看護の統合と実践の領域で構成されている。小児看護学は、小児看護学概論（2単位 45時間）、小児看護援助論Ⅰ（1単位 30時間）、小児看護学援助論Ⅱ（1単位 30時間）で構成されており、今回の授業実践で述べる小児看護学概論のねらいは、次の2点である。

- 1) ライフサイクルの中で連続的に最も著しく成長発達し、生涯にわたる生活行動の基盤を形成する重要な時期にある小児の存在を理解する。
 - 2) 小児各期における成長・発達の特徴を理解し、小児が健やかに成長・発達するための小児看護のあり方について多角的に思考できる。
- ねらい 2) について、ジグソー学習法を用いて授業展開した。その結果、学生の主体的な学習行動を引き出したので報告する。

2. 授業実践

- 1) 協同学習を用いた授業の目的：小児各期における成長・発達の特徴を理解することは、小児看護の実践に不可欠である。小児各期を5つに区切りジグソー学習法の学習課題として設定し、学生個々が教師役としての役割を担い専門家チームで学習したことを、責任感をもって他者に伝えることで、知識習得を深めることができる。
- 2) 期間と対象：2014年度前期に小児看護学概論を履修したA看護専門学校2年生40名。
- 3) 授業方法：開講時の授業で、協同学習法のジグソー学習法を用いて学ぶ目的について説明し、グループ編成を5名とした。学習課題として、小児の発達段階を新生児期・乳児期・幼児期・学童期・思春期の5つの期として設定し、各期の身体の形態的特徴、技能的・精神的発達の特徴について学び、グループ内で教えあうこととした。教師役として説明する際に使用する資料と、発表後に知識習得を評価するための確認テスト（15分間で実施）を作成してもらった。ジグソーグループでの発表は、新生児期の学習課題を担当

した学生から順に、20分/1人を目安に順次行った後に、質疑応答や感想を述べ合う時間を各10分間ずつ設定した。教員は各学習課題の発表の時間管理を行うとともに、全員の発表状況をよく観察した。発表終了後には、各学習課題の内容について教員が作成した資料を配付し、知識の再確認を行った。毎回の授業終了15分前に、授業のふり返り用紙への記入時間を設けた。

3. 成果と考察

学生が記述した授業ふり返り用紙を分析したところ、学生の様々な学びが確認できた。ふり返り用紙から得られた主な成果は次の2点である。

- 1) 「グループメンバーの意見を聴くことで、自分では気づくことのない、新たな発見があり小児看護への視野が広がった（記述者:60%）」
- 2) 「自分の考えが正しいと思いがちであったが、メンバーの意見を聞くことで人の考えに耳を傾け、その意見を取り入れて行く大切さが学べた（記述者:58%）」発表状況の観察と学生の記述内容からわかったこととして、ジグソー学習法を取り入れたことで、学習活動に対し責任感をもって取り組む姿がみられた。普通のグループ学習に生じやすい人任せや不参加の学生は見られず、全員が学習に参加する姿がみられた。また、「グループメンバーと教え合い学び合ったことに感謝したい」など、グループ学習へのポジティブな発言がみられた。さらに、小児看護への視野を広げることができていた。態度面では、よく遅刻をしていた学生が1度も遅刻せず主体的に学習する姿など、主体的な学習行動を観察できた。今後は、学生が学習に責任と楽しさと喜びを実感することで、能動的学習者へと成長し、看護職としての資質を育成していける授業の工夫を重ね、研究的視点でその効果を明らかにしていきたい。

(参考文献)

- 1) ジョージ・ジョウコブズ、マイケル・パワー、ロー・ワン・イン、監訳関田一彦：先生のためのアイデアブック協同学習の基本原則とテクニック、日本協同教育学会、2007。
- 2) 関田一彦：看護教育に協同学習を取り入れる、看護教育、54（4）、675-676、2013
- 3) 緒方巧：看護教育に協同学習を取り入れる、看護教育、54（4）、320-326、2013。
- 4) ジョンソン、D.W./ジョンソン、R.T./ホルベック、E.J.著：学習の輪 学び合いの協同教育入門、二瓶社、2010。